

楽しさと気軽さを重視した プログラムでワーカー層が参加

東京都板橋区

特定非営利活動法人ドットファイブトーキョー

ボランティア活動と縁遠いイメージのあるオフィスワーカー。両者の橋渡しをして、一人でも多くの人を市民活動に誘おうと事業を展開しているのが、特定非営利活動法人ドットファイブトーキョーだ。参加者の自由意思を徹底的に尊重し、いつでも、1回だけでも活動に参加できる気軽さが特徴といえる。同法人では、企業と地域が協働するプロジェクトも推進している。代表理事の原口悠さんに、団体設立までの経緯、活動の理念、参加者の裾野を広げるためのコツなどをうかがった。

地域活動参加促進のポイント

- 「ドットファイブ」とは「0.5」。各セクターの間で仲を取り持つ、参加者に半歩踏み出してもらうという2点を意図している。
- 東京で開催している個人向け事業は気軽な活動で構成。参加希望者には好きなプログラムを選んでもらい、多くの人々の参加を引き出す。
- 楽しくオープンな雰囲気づくりで、オフィスワーカーや学生の継続的な参加を実現している。
- 参加者にとって安全で快適な居場所をつくる、風通しをよくするなど、人間関係をほぐすことも注力している。
- 東京以外の各地で展開する企業と地域が協働するプロジェクトでは、セクターや業界を越えて社会課題の解決を目指している。企業の新規事業開発に資する仕組みを作り、Win-Winな関係を構築する。
- 有力サイトを活用し、意義ではなく気軽さや楽しさを感じる情報を発信することで、“つい半歩進んでしまう”状況を作る。

最初の0.5歩を踏み出す役割を果たす

特定非営利活動法人ドットファイブトーキョー（以下、ドットファイブ）では、社会的課題の解決を目指し、「ひとりでも多くの人たちの、ささやかな参加」を促すことを目的に活動している。

「ドットファイブ」とは「0.5」のこと、①産業、福祉、教育、行政など各セクターの間（0.5）に入って仲を取り持つ、②一歩を踏み出すことに躊躇する人に向けて、まずは半歩（0.5歩）踏み出してもらう、というふたつの意味が込められている。

ドットファイブが取り組む事業のひとつが、東京で開催している個人向け事業で、高齢者のお化粧、マージャン、おしゃべり、映画鑑賞、障害のある子どもたちとのサッカーといったプログラムを通じて、多くの人々の気軽な参加を引き出していく。各プログラムは都内の特別養護老人ホームや障害者施

設など5か所において週替わりで実施しており、利用者の人気も高い。「お化粧のプログラムにどうしても参加したいと、入院先の医師に退院をお願いしてくれるおばあちゃんもいて、嬉しく思っています」と代表理事の原口悠さんは笑顔で語る。

ドットファイブでの活動希望者はメンバー登録後、好きなプログラムを選んで参加する。いつでも、1回でも参加できる気軽さが売りだ。参加者に「真面目に準備して」「介護を勉強して」といった要求はせず、来た人に「次はいつ来る？」と聞くこともない。「むしろ、『うちの活動はやりがいゼロ』と公言しています。『助けたい』『役に立ちたい』と思うと、相手を弱い存在にしてしまう。全く弱い存在ではないのに。また、『ねばならない』とい意気込むと、その場で起きる様々な出来事に気づけず、もったいない。気持ちをフラットにして、力を抜けば、だいたいどんな相手とでも交流を楽しめます。逆説的です



ドットファイブトーキョーの代表理事・原口悠さん。2011年2月に活動を開始し、2013年に団体設立。大牟田未来共創センター理事、TOMOSU理事の顔も持つ。

が、それが結果としてやりがいにつながるのです」と原口さん。

現在、登録者は約4,000人。メインはオフィスワーカーで、他に大学生や中高生、シニア層もいる。定期的に活動するアクティブなメンバーは200～300人に上るが、原口さんはもっと多くの人が社会的な活動に意欲を持っていると考えている。「誰かに出会いたいとモヤモヤしている人、人を元気にすることが活力になる人は山ほどいるはずです。そういう人が気軽に活動に参加できるように、最初の0.5歩を踏み出す役割を果たしたい。0.5歩踏み出してみて、あと0.5歩進みたい人は自分で勝手にやり始めます」と原口さんは語る。

ビジネスとボランティアの断絶を解消するために

大学時代に国際協力のNGOでインターンを経験した原口さんは、卒業後、業務委託の形で大手企業の採用プロモーションやブランディングを仕事につつ、大学院で公共学を学んだ。さらに、がんの患者さんや障害のある人と関わることも並行して行った。「どの人もそれぞれ大変な立場に置かれているはずなのに、本当に温かく迎えてくれました。むしろ私が助けられてばかり。みんなさまざまな経験をしているから話が面白いし、優しいし、いろんなこ

とを学ばせてもらえる。力んでいた自分が想像していたものとは全く違う、友だちのような関係がそこにありました。あの時の経験がぼくの原点です」

自らの体験をもとに、野宿をしている人たちの医療相談会の現場で楽しくオープンな雰囲気作りを心掛けたところ、学生やオフィスワーカーたちが継続的に大勢参加するようになった。結果的に活動の幅が広がり、より多くのニーズにきめ細かく対応できるようになったという。「楽しさ」が市民活動を活性化させる鍵となったわけだ。

企業向けの仕事と市民活動を両立するなかで痛感したのは、オフィスワーカーとニーズを抱える人々の断絶だった。一般にボランティアというと、「問題意識を持って取り組む」「自己犠牲をいとわない」といったイメージを抱きがちだ。一方で、受け入れる側の施設などでは人手が不足しているため、「ボランティア＝お手伝いさん」という風潮も根強い。その結果、「軽い気持ちでは困る」「継続的に来てほしい」といった要求を参加者に押し付けることになり、断絶を生むのではないかと原口さんは考えた。「ビジネスとボランティアという両方の世界を行き来することで、相互によいフィードバックも得られます。両者が分断しているのは違和感があるし、もったいない。断絶を解消するための活動が必要と考え、2013年にドットファイブを立ち上げたのです」



障害のある子どもたちとサッカーを楽しむ（認定NPO法人トラッソスが受け入れ）。



高齢者のお化粧プログラムに参加したボランティアの仲間とともに。

ドットファイブは奉仕や貢献という意識ではなく、「一緒にいたら楽しい、心地よい、また会いたい」という気持ちを大事にしたい」と原口さんは言う。「助ける人と助けられる人」でなく、あくまで「人と人」という関係を重視しているのだ。「ボランティアだからと言って、活動で出会った人といつでも仲良くなるなんて無理。ボランティアだから気を遣って仲良くするなんて続かない。気の抜けた雰囲気のなか、なぜか時に不思議と気が合う人がいる。何度か会ってちょっと踏み込んだ話をするとき、いつの間にか気になる存在になるんですよね。あの人どうしてかな、また会いたいなと思う。そういうワクワク感が私たちの活動の根本にあります」

ボランティア参加者と施設利用者とのフラットな関係は、まず参加者を大事にすることから始まる。そのことが心地よい雰囲気をつくり、ひいては施設職員の心も和らげる。「人は尊重されると、力が抜けて自らに課していた『ねばならない』呪縛が解けていきます（笑）。そうなると、なんだか優しい感じのオーラが出てくるのです。参加者にとって安全で快適な居場所をつくること、そして施設全体の風通しをよくして人間関係をほぐすこと、それも自分たちの役割だと考えています」と原口さん。

セクターを越えて共創する プロジェクト

ドットファイブがもうひとつ取り組んでいるのが、東京以外の地域ですすめている企業と地域が協働するプロジェクトだ。活動の理念は地元主体ですすめること。そのためドットファイブトーキョーとは別に地元に法人を設立する。福岡県大牟田市の一

般社団法人大牟田未来共創センター、奈良県奈良市では、一般社団法人TOMOSUを立ち上げ地元主体で、セクターや業界を越えて、人、事業体、情報を組み合わせ、解決策を生み出す取り組みを続けている。

プロジェクトのテーマのひとつは「リビングラボ」だ。企業が地域の主体や生活者とともに、新しい商品やサービス、新たな政策の創出を目指すもので、大牟田未来共創センターのプロジェクトには製造、情報、インフラなどの分野から企業が参加している。「例えば認知症の人の役に立つものを作りたい」と企業は考えるわけですが、『かわいそう』とか『行動を管理しなければ』という考えに基づいていては、当事者のニーズをとらえることはできません。まずは企業と地域や生活者との関係づくりの間に入り、企業の社員が持つ先入観を外していくことで自分と相手が同じ地平に立つことを促し、より本質的な価値の創出するサポートをしたいと考えています」と原口さん。企業から対価が支払われるため、地域の側にも価値があるスキームといえるだろう。

TOMOSUでは、創業支援施設をリノベーションし、1階にはカナダにあるネイバーフッドハウスのような、子育て中の、シニア、障害のある人など多様な人たちが、気軽に集える場を始めている。創業とは一見すると無縁に思えるが、「その理由は、私たちが創業を、全ての人たちが安心できる場で、人的、知的な交流を通じて『自ら動き出す』ことだと考えているからです。新たな趣味を見つけること、学び直しを決意すること、例えば子育てサークルを立ち上げること、それらは立派な創業です」と原口さん。

2階にはコワーキングスペースがあり、もともと



日本赤十字社総合福祉センターにある障害者支援施設を訪問して、ノンビリ。



おじいちゃん、おばあちゃんと近くの神社に初詣へ。

起業を志している人、起業家、クリエイターたちが集う。新規事業の開発を目指す企業の担当者も集まり、リビングラボも展開する。もちろん、1階と2階は自然な導線でつながっている。「デンマークがそうであるように、多様性、安心して暮らすこと、自主性を尊ばれること、多様な交流があることは、産業のイノベーションの基盤だと思うのです。ここにも福祉と産業の新たな統合の形があります。そして、多様性から生まれるイノベーションは、自ずと持続可能な地域や社会を実現していくはずです」

誰にでも開かれていることが 共生社会の本質

原口さんに多くの人を活動に巻き込むためのコツは何かと聞くと、「意義や社会性よりも、楽しさや心地よさを大事にすること」という答えが返ってきた。「参加のハードルを下げることでいろいろな人が参加することになり、トラブルが起きるのではと不安視する向きがあるかもしれません、私たちの団体の活動で大きなトラブルが起きたことはありません。心配は無用です。それよりも、ワクワクするようなデザインやコミュニケーションを設計することで、一人でも多くの力を引き出すことがこれから社会には求められていると思います」

また、参加者の拡大のためにはまず、難しく考えず、シンプルに見ている人が多いプラットフォームに情報を掲載することも重要だという。自団体のサイトを訪れる人を増やすのは、その後でゆっくり考えればいい。日本財団が提供する公益事業コミュニティサイト「CANPAN」に情報を告知すると、「Yahoo! ボランティア」に転載され、PR効果が大き

いそうだ。また、ボランティア情報サイト「activo（アクティボ）」も多くの人々目に触れる。「ウェブを活用して、しかもワクワクするような情報を発信すれば参加者の裾野は必ず広がります。はじめの0.5歩が楽しく豊かになれば、残り半歩は近い。“つい半歩進んでしまう”状況をどう作るかが肝でしょう」。

共生社会の本質は、弱い人たちが努力することでもなく、弱い人たちを社会につなぐことでもない。社会の側が誰に対しても開かれていることを目指すものだと原口さんは考えている。「一緒に暮らしているはずの人がそこにいない、それが断絶された社会なのだと思います。本来あるべき社会で会うべきだった人が会えるって、こんなに楽しいことなんだよと伝えたい。7年間、毎月同じ施設に通っているけど全然飽きないんですよ」と屈託なく笑う原口さん。カラフルな人間関係に彩られたその表情には、充足感があふれている。

「総務省は自治体のプラットフォームビルダーへの転換を提言しています。今後行政機能は縮小し、個人や団体の想いを引き出し、後押しする側へ回っていく。となると、市民活動は参加者の自己実現や幸福感に直結するようなものであることが望まれます。これは古くて新しいテーマ。活動を誘発するエンジン役は、これからいっそう重視されると思います」と原口さん。ドットファイブの活動は、働く人の地域活動参加の入口となって、多くの人を巻き込み広がりをみせていく。

ドットファイブトーキョー facebook▶

